

古川ちかし・林珠雪・川口隆行編著『台湾・韓国・
沖縄で日本語は何をしたのか：言語支配のもたらす
もの-』

波瀾, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院助教授

<https://doi.org/10.15017/11034>

出版情報：九大日文. 10, pp.65-67, 2007-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



◎書評

古川ちかし・林珠雪・川口隆行編著
『台湾・韓国・沖縄で日本語は何をしたのか——言語支配のもたらすもの——』

NAMIGATA
波瀾 剛

二〇〇五年七月二日と三日の両日、台湾中部の台中市にある東海大学で国際学術シンポジウムが開かれた。「台湾・韓国・沖縄で日本語は何をしたのか」。植民地や言語支配の問題を取り上げようとする場合、台湾、韓国、台湾のあとに満洲を思い浮かべていた私にとっては、「琉球は長男、台湾は次男、朝鮮は三男」（二六二頁）という発想から問題を取り上げること自体が新鮮だった。この刺激的なテーマに魅かれて私も初めて台湾に赴いた。

あれからあつという間に二年が経過した。当日の白熱した議論のやりとりを傍から見ていた者としては、このままで終わってしまつてはもつたないとかねがね思っていた。本書はそうした期待に応えてくれた論文集である。

本論の構成は四部立てで、それぞれ三章ずつ、計十二本の論文から成る。第一部「台湾——切断と継承」では、日本語とい

う言語を媒介とする近代的な知の獲得のあり方が議論されている。これは第二部、第三部とも共通する課題なのだが、他の地域との違いに焦点を当てて読んでみると、台湾の場合には日本語との相対的な距離、あるいは道具としての言語という意識がより強く働いているように感じられる。

第一章の陳培豊「反植民地主義と近代化」は、日本語という「国語」による「同化」教育政策が、「日本民族への同化」と「文明への同化」という二つの要素を内在していた点に注目する。そのうえで、当時の台湾人は「同化」教育を「文明への同化」として「積極的かつ選別的に摂取」し、「統治者を巧妙に利用」したのだと評価する（三五頁）。また、第二章の李承機「植民地期台湾人の『知』的体系」では、日本語リテラシーを有していた台湾の知識人と、漢文、あるいは口コミよつて知の回路を形成していた民衆との差異、またその差異が使用言語の不均衡によつて知識人と民衆との断絶へと深刻化した過程が明らかにされる。さらに、第三章の何義麟「戦後台湾における日本語使用禁止政策の変遷」においては、活字メディアの管理政策をめぐつて日本語の扱いが揺れ動いた状況をとらえ、一九四五年以降すぐさま日本語使用が禁止されたのではという先入観とは異なり、反共政策の浸透を目的として一九五〇年に日本語新聞が発行されていた事実などが明らかにされている。

第二部「韓国——抗争と戦略」になると、日本語を道具としていかに扱っていたのかという視点に代わつて、「もつとも厄介な他者」としての日本語が前面に登場する。この厄介さは「日

本語と朝鮮語とが構造上きわめて近いために、日本語が及ぼす影響力は他に類を見ないほどの深い刻印を与え、そしてそこから離脱するのがきわめて困難（二〇〇頁）であった状況を指している、たんなる道具としてみなしきれない日本語との葛藤が論じられてゆく。

第四章の佐野正人「日本語との抗争から和解へ」では、朝鮮における日本語教育が近代的民族語として成立した「朝鮮語Ⅱ国文」との抗争関係にあつた時代から、「国語」Ⅱ日本語世代が登場し日本の文壇に進出する時代を経て、解放後のハンゲル世代へと至る言語編成史が概説される。続く第五章の安田敏朗『日本語』という『配電システム』は、「国語」を「国民国家運営の制度を効率よく運営する」ための「単一で均質な言語」としてとらえる（二〇四頁）。そのうえで朝鮮における「国語」の制度構築が、「日本語」から「朝鮮語」へと言語を移行しつつも、枠組みそのものは残存し、再生産されていた可能性を指摘する。そして、第六章の金賢信「戦略としての『日本語』教育」は、一九七三年から高校の第二外国語に追加された日本語の教科書に注目し、経済優先政策によって日本語教育が導入されたものの、「文化的に侵食される恐れ」（二三頁）が強く、「感情的には日本を受け入れ難い」（二三八頁）という国民感情がどのように克服されたのかを検証している。

第三部「沖繩——継続する戦争」は、台湾、韓国よりも早い時期に端を発し、そしていまなお続く「内なる外部」（二八四頁）から見た日本語について議論されている。第七章の川口隆行「戦

時を生きる」は、普天間基地周辺に立てられた学習塾の看板の文言から議論を起す。そして、「今もそこは戦時であり戦場」（二四五頁）である沖繩の姿を確認し、それゆえに「日本語」の「統制を解体Ⅱ脱構築」することが「沖繩語」の役割ではないかと指摘する（二五一頁）。第八章の屋嘉比収『日本語Ⅱ日本民族』の編成でいかに翻弄されたか—では、「東京ノ言葉」、「普通語」、「標準語」、「共通語」と変化した「日本語」の呼称、そしてそれと対応するかのようになり、「日本語の姉妹語」、「方言」、「非国民であるスパイの話す言葉」へと編成された「沖繩語」の歴史が、郷土史家島袋全発の軌跡を通して考察されている。さらに、第九章の新城郁夫「日本語を内破する」は、沖繩において「日本語」が「極めて強固な規範となつて政治的に機能している」（二七五頁）という前提を踏まえて論を進める。そのうえで又吉栄喜の小説『ジョージが射殺した猪』（一九七八年）における「日本語」の位相に、「自らの姿を消去し、媒体としての中立性を偽装しつつ、東アジア全体の戦時体制化に深く関与していく日本という国家の在りよう」を読み取る（二八四頁）。

こうして台湾、韓国、沖繩における日本語の歴史的な位置づけが試みられた後、第四部「日本語の現在——誰の言葉か」は、現在進行形にある日本語教育の問題へと接続する。第十章の古川ちかし「主流派の言葉と公共の言葉」が指摘するのは、「最近まで『日本国にマイノリティは存在しない』と政府が公言していたように、日本では「日本語」の教育Ⅱ国語教育が「主流派の再生産」であるという認識すら存在しない」（一九二頁）

状況である。こうした価値観に基づく「日本語」の輸出に対して、外国語としての「日本語」を、各国での開発や教育を考える「公共的なディスコース」として模索する方向性が見いだされる。第十一章の坪井秀人「〈日本語問題〉への序奏」は、現在の国内における日本語ブームについて、「(正しい日本語)を求め、排他的な欲望と音声的な流暢さへの盲目的とも言える没入・耽溺が、〈外人〉的(『雑種的』なるものの排除の上に成り立っている)(二二一頁)と指摘する。だが、これは現在だけの問題ではなく、一八世紀における国民的同一性の問題、あるいは近代詩の成立や民謡の歴史ともつながる議論であるという広がりを見せる。第十二章の春原憲一郎「グローバル言語の教育という営為」は、「日本の多国籍企業」がアジアの非英語圏では「日本語を社内共通語とする」のに対して、「英語圏諸国やアジア以外の国・地域では日本人社員に英語研修をさせ、英語で業務をする」(二三三頁)といった傾向にグローバル時代における市場原理を見て取る。しかし、こうした時代にこそ「他者

の生き方を想像」し「他者と世界を創造」(二三七頁)する営みが必要とされるのだと説く。

各章を読み進めて分かるのは、各々の論者が互いに他の論文を参照し合い、論文集における位置づけを明確にしている点である。こうしたことを可能にするためには、執筆者がシンポジウムにおける議論をしっかりと踏まえ、たうで論文を執筆し、さらに編集段階においては担当者が丁寧に各論に目を通して執筆者と調整を行なったからに他ならない。苦勞の賜物であり、頭が下がる思いである。欲を言えば、「横領」といった用語の使い方に関する注文などを挙げることもできる。しかしながら、どの論考も非常に興味深く、広く読まれることを望んでいる点を強調して終わりたい。

(二〇〇七年三月 三元社 二四一頁 二六〇〇円＋税)

(九州大学大学院比較社会文化研究院准教授)